

科学がみる未来予想図。「Futures」セクションでは、いま話題のサイエンスフィクションや作家たちの作品を取り上げます。私たちの未来はどうなっているのか。Natureの巻末を毎週かざるこのページは、(とりあえず今はまだ) 科学的事実でない展開へと、読者をいざないます。いざ、想像の世界へ――

When Britney Spears comes to my lab

ブリトニー・スピアーズ、研究者となる!?

Nature Vol.451(106)/3 January 2008

Vince LiCata

これこそがポップカルチャー!

報道即解禁：米国ルイジアナ州出身のブリトニー・スピアーズさんが、生まれ故郷のセントウッドにほど近いバトンルージュにあるルイジアナ州立大学（LSU）で、いくつかの講義の聴講を検討していたもようだ――。

ブリトニー・スピアーズがLSUにやってくる。(腕を動かさないかぎり) おなかの露出がそれほどひどくないシルバーのストラップレスのストレッチトップに黒のカプリパント、それにちょっとずり下がったベルト、といったいでたちで。大学に着いたら、ブリトニーはさっそく、学生研究員として私のラボで研究を始めることになっている。なんとといっても、生物学入門は彼女の予想を超えておもしろい。学生用の実験室で死んだ動物の体にメスを入れれば、奇妙な、酔っ払ったような気分がこみ上げてきて、頭は少しくらら、でも、わずかに心地よくなってきて……。となれば、彼女はほんものの科学研究をより詳しく学びたいという衝動を感じるようになるはずだ。

ブリトニーには、実験中にガムをかまないようにといひ、pH 計にからみついた髪をどうやってほどくのか、「必ず適切な換気を実施して使用すること」というラベル記載の意味を教えるつもりだ。少し経てば、彼女自身の研究プロジェクトが決まる。おそらくは、我々の糖尿病プロジェクトの1つとなるだろう。ポップスターの手による糖脂質代謝異常の研究は、きつうまくいくはずだ。ブリトニーは、有益なデータをたくさん出してくれるだろう(そもそも彼女はちょっとしたワーカホリックだ)。でも、やがて音楽活動や断続的に繰り返される結婚・妊娠によって、それにももちろんほかのクラスにも出席しなければならないわけで、彼女がラボで過ごす時間は徐々に少なくなり始

める。研究への取り組み態度については、とりあえず私も一般的な小言を呈するくらいはするつもりだが、最終的にはブリトニー自身が、実験により多くの時間をかけることに決めるだろう。まさしくあらゆる勤勉な科学者と同じように、実験が好き、という理由で。

ブリトニーが熟練し、1人で実験を進められるようになると、けがをすることが少なくなり、実験器具を壊すことも減っていく。ライクラ素材のストレッチトップと自動滴定装置という組み合わせが引き起こす悲惨な出来事を経験したブリトニーは、地味な服装に変わっていくだろう。彼女の実験データは、信頼性が高く、再現性があり、論文発表できるレベルのものとなる。長期休暇や休日を利用して新曲のレコーディングを行ない、夏休みにはコンサートツアーに出る。でも、それ以外の多くの時間は実験に費やし、時には飛行機での日帰り出張もこなしてしまうようになる。

最初はブリトニーの存在に衝撃を覚えた新入生たちも、彼女が研究グループの中で最も生産的なメンバーの1人であることをすぐに理解する。そのうちに研究室のメンバー全員が、うるさくつきまとうレポーター陣を丁重かつ効率的に追い出す方法を身につけるだろう。研究室のドアの外には、さまざまな追っかけグループが常にたむろしているが、そのほとんどは行儀よくしている。

ブリトニーの科学に対する貢献は、私の研究室の外にまで幅広くひろがっていく。ブリトニーは、基礎科学に対する一般市民の興味を、これまでにないレベルにまで高める。あらゆる研究分野への投資額も、奇跡のようなレベルに跳ね上がるだろう。

ブリトニーは、私たちは病気の治療を考える前にまず、おのれの身体の仕組みの基礎を理解しておく必要がある

ということ、広く一般に教えていく。もちろん、一夜にしてなしえることではない。実際に、TV番組「エンターテイメント・トゥナイト」で研究に関するインタビューを受けたブリトニーは、最初、「adipocyte（脂肪細胞）」の発音を間違えていた。でも、まもなく彼女の公開講演で間違いが聞かれることはなくなり、話の内容も的を射たものになっていく。科学者のキャリアにつく若者や有名人の数は飛躍的に増加する。

LSU卒業後のブリトニーは学業を重ね、ハーバード大学でPhDの取得をめざす。学位論文の面接を受けるのと同じ月には、グラミー賞授賞式の共同司会者として、透かし編みの卒業ガウンに博士帽という衣装で登場。その後、パリのパスツール研究所でポストドク研究に入ると、フランスの日周リズムによく適応し、朝の11時頃にぶらぶらと散歩しながら研究室にやってきて、夜は10時のディナータイムまで働き、お気に入りのモンパルナスのカフェで夕食をとる生活を送る。彼女の研究テーマは、大学院時代に開発した抗糖尿病治療に対する動物個体の応答で、これが全世界の関心を集めることになる。フランスのジャーナリストも、かつての米国ジャーナリストと同様に、ブリトニー博士へインタビューするにあたっては、生化学の基礎をある程度勉強しなければならないことを認めざるを得なくなるだろう。

さらにその後の数年で、ブリトニーはセントジュード小児研究病院（テネシー州メンフィス）の生化学科で最初の教官のポジションに就き、自身のラボをもつようになり、研究室には録音スタジオを併設する。同僚たちは、彼女の露出度の高い服、けばけばしいアイライナー、研究室から絶えず鳴り響いてくる音楽に不快感を抱くだろうか。まあ、なかには不快に思う者もいるだろうが、ほとんどの者は、びたびたのスパandexをまとった身体に、実はひたむきな科学者の心が宿っていることに気づくはずだ。ブリトニーの研究は、有望な新しい糖尿病治療法の発見に結びつく。多くの科学者の場合と異なり、ブリトニーは、研究発表にでかける際にボディガードを雇わなければならない。彼女に関するFBIの年次報告書には、彼女に対してストーカー行為をはたらく者の大多数がPhD取得者であることが記されるだろう。

さらに数年後のある夜のこと、ブリトニーは、エルビス・プレスリー大通りに面したダイナー（簡易食堂）で1人、コーヒーをゆっくりと飲んでた。深夜の時間帯に設定された観察を行う学生を手助けするため、眠気覚ましをしていたのだ。彼女は、窓の外を眺めながら考えていた。もし、実験に長い時間を費やさずに、あのまま音楽活動に専念していたら、いまごろはどうなっていたら、と。窓には、彼女の1つ手前のブースに座る男の子と母親の姿が映っていた。ふと、男の子が読んでいた本から目を上げた。

「ママ、『とうようびょう』ってなあに？」。

「それはね、からだの中で、お砂糖が正しく消化されないう重い病気のことよ。目が見えなくなったり、足を切り落とさなくちゃなくなったり、死んでしまうこともあるの」。

「うえっ。ボク、そんな病気になったらやだなー」

「病気にはかかっていないからだいじょうぶよ。それに、もし糖尿病になったとしても、いまは治せる新しい方法がたくさんあるって聞いたわ。ブリトニー・スピアーズもそのための研究をしているって」。

男の子は再び本を読み始めた。それを見て、コーヒーをもうひとくち口にするブリトニー。顔を上げてウエイトレスと目を合わせたブリトニーは、パイをひと切れ注文した。ダイエットをしなければならぬのだが、もう何年も公の場でおなかを見せていない。ラボに戻る時刻までは、まだ20分も残っている。 ■

Vince LiCata は、ルイジアナ州立大学准教授（生物科学）で、タンパク質の構造と機能を研究している。劇作家でもあり、その作品は、米国のいくつかの都市で上演されている。

Futures は *Nature* 人気セクションの1つで、通常は編集部からの依頼原稿ですが、自発的な投稿も歓迎します。内容は完全なフィクションで、一話で完結していなければなりません。ジャンルは、ファンタジーやホラーではなくてSFです。この記事に関する読者からの投書が2月14日号 p.768 の「Correspondence」に載っています。興味のある方は是非お読みください。

なお、Correspondence は新聞の投書欄に相当するセクションです。*Nature* 掲載記事（論文以外）に対する読者の意見・感想が中心ですが、科学にまつわる一般的な話題や政治問題、あるいは逸話的話題なども取りあげます。ときには、ジョークを交えた投書も掲載され隠れた人気セクションです。日本からの投書も大歓迎です。詳しくは、*Nature* 投稿サイト (<http://www.nature.com/nature/authors/>) をご参照ください。

